

3月24日の師範稽古は、
「6年生卒業稽古」
として行なわれた。



今年、小学校を卒業する道場生は7名。
いずれも数年間、道場での厳しい稽古に耐えてきた。

春からは中学生となる彼等にとって極真空手はどのようなものだったのだろうか。

横尾圭祐君



「強くなって色んなことができるようになりました。
重たいものが持ち上がったり、体が柔らかくなって脚が高くあがるようになりました。」

二階堂樹君



「空手を通じて、つらい事、苦しい事、沢山あったけれど、心身共に強くなれて嬉しいです。」

福田有希さん



「合宿や色々な行事があって楽しかったです。」

笹島大地君



「空手を通じて沢山の友達ができました。中学校に行ってもがんばりたいです。」

重松海君



「まだまだ自分は立派な人間ではないので、
これからも空手を頑張って自分を成長させていきたいです。」

曾我翔大君



「空手を始めた頃は泣き虫だったけれど、つらい稽古を乗り越え、
友達に支えられて強くなることができました。」

菅優作君



「先生方が僕達を成長させるよう様々な教え方をしてくれたことは、
どれも12年間の人生の中で一番の思い出であり、宝です。」

この日、今西師範はいつもどおり終始厳しい表情で子供達に激を飛ばしていた。



「生きるってことは厳しいんだ！
生きていくためには常に努力していかないといけないんだ！」

空手をやっても、その厳しさに打ち克つ力が身につかないのでは何の意味もないんだ！
だから稽古が苦しくても絶対に手を抜くな！」

今西師範の指導は昭和の体育会系を彷彿させるほど根性論に重点を置いている。
だが「優しさ」と「甘さ」、「自由」と「自分勝手」などを履き違えてしまいやすい現代において、
あえて厳しさを体験させる極真空手の稽古は、子供達にとって
とても価値のあるものになったのではないだろうか。

この子供達はこれから中学、高校と成長するにつれ社会の厳しさに直面するであろうが、
きっと稽古で培った力で社会の厳しさを乗り越えていくに違いない。



そして、その時に師範の厳しさに隠れた優しさを実感することだろう。

✕ 閉じる